花筐 五

208
15
700

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

梳髪奇方 髪の利 為永春水家傳
代三十六銅
此初入どりといふ脂垢とり薬八清浄のこなりにて髪の毛の名小百合紅彩の粉方あり常ふだんを用ひあまたび髪の樽まてをいふ事なり　如何様ふ脂垢多き人方ありとも治らぬといふるあるなり又血のあふて髪のまりて解ぬる癖のある方八洗ひてもなほ垢の残さるハ白髪赤毛備毛などを治し数をいとこの手神のおとしなりハ本観書ふあるべ

御粉の處女香
江戸京橋南の方弥左衛門町中程
大嶋屋傳右衛門精製

四時遊観花筐初編巻之中

東都　松亭金水編次

第三

ものを思ふ人の嘆きと思ふ歌

最初八多性で相性の。海八互の実と実それぞれなるなくみ松次郎八。おちゐ海〜もそのゆの動れ。お絵と枝をうへせ」ようの。悩くもあ〜も。絵ばとそまこ可ゑくも見八れどうゐ悪ゐ。怪の。羅八切ふ易ゐ。雨ふつけ雪ふつけ。お絵ゐ汗ふ来るのこ。家屋も海ゐ。ひ彩互の素店屋

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

雪駄の外をうてて。お鬼様のを引移ら。松次郎ゞも完
りて。他の不足なく云せるゆ。あの七人殺ゆ潔り。百両あれば
二百両ゆ。とて又てうゞ浅草の人情。お鬼八貧しき者ゝより。今
松次郎ゞ世話ゆ。是歌八元より髪の師。辰のさんも
流れを。利ゆ。とりゆ。扨お文の酒宴ゆ。殺ぬ八彼
の内酒瓶。黒塗の長持八。お孫まゞひの土瓶をそえ。
親の利ゆ大四ゝ八水茸の茅を仮ゆ。湯屋の鏡蓋ゆ
不足の山の内きをうつせば。箱屋の押蔵。田子の浦田の

早苗ゆ凝らゆ。郭ゆ物く赤を久ゆ実しも。大石四を形ゆ
ゆる。かゆ思ゆれどゆ無ゆ。不足をせどて松次郎ゆ。とても
彼して形して。とゆうまて。ゆく引ぬの八。猿金者の乳母て。
入用のかゝる八厨八れど。日無ゆ暮る太鼓ゞ不切ゆ。今八いき
さう跡をゆ。指ゆ入うて熟寝も。浅き縁うこのゆど八を
さへ。さゝくうゆけり。そよ松次郎ゞ筆捷八。ゆ場町の米
問屋うて。小僧や泳ぎうとゆるゞ。松次郎ゞ七軒の酒
本妻八世を去て。後妻のゆ彼とて。世話する八もあり。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

なるべ。徒部と徒兒の中の。芸ハ稚まれるのうれべ。松江邸ガ
為ゆもあく。家の口まの元ゆうとて。後配をべ近くべれべ。まど
老わくる分ゆもあくれべ。年来汁婦ゆて仕えるる。おのとく
るハ此奴さまで美くうハあくれべ。まと醜もあくまでく。ふたつ
ぎ妻の辞世くより。万のエふんをつけていと信ずるあうれべ。
ゆのロくこをを生くの。後ハ今痕の出入をも。おくふさせてあ
のエ。ゆ生ゆく但せよなべ。今までお六どんと呼くうく。待ぎも
みる角くく。板づけふまるゆうふゆるべ。お六ハ稍ふ落つ。大

小のエ。ゆふまれ。ゆふ但せぬエとも。ゆく。一家のゆよ威を振と。
ゆ代ゆのゆさんも。おくハありとゆいと。ふたゆ生ハ此奴。さで
ゆ実ゆるのふふくて。家業ハ万ゆる書改まる世。家内のエハ
お六ゆ但くて。若も悪も撞ハれべ。差べ織る人もあれど。ゆの
接歳ハ冷万ゆく。みるその下風ゆよ立のくく。おくとくをふ。
ゆくくあくハ良人をりもて。ゆのゆ一人ありしくど。その良人ふ
ふゆくれて。ゆ兒ハ結の方ふ新け。その年十代ふゆくくべ。今
威物を振くるふつけ。ゆ兒も出世させくゆ男ハ武ゆ元の傳

国立国会図書館　花笠 5編 208-700

ガラス使用

めがうつふ。その女児を引うて。よ浄くあたたまりをりて。
糸をまつ。元来お六性せ。発も角もことのへるどふ。年生とを
引うて。究竟松次郎ゴ妹のめく。琴今こ味線を始めとして。諸
業の湯あどまでもんのあるよ。ふみ師匠を拵ゴ。稽古あよ。
あくさぐれば。知らぬ者ふ松次郎ゴ。妹とおのめて。お嬢さまと。
呼ぶめさんと。実りれば。おのふふ。楽ゴ行向ゴ。実ふ浪人の人ふ。
その女児とりのことも。私うくぬその風俗今とも。ふ年ゆ。
名のいの字の初沢さん。知らぬ児伝のことゴ。結ようちゆ。

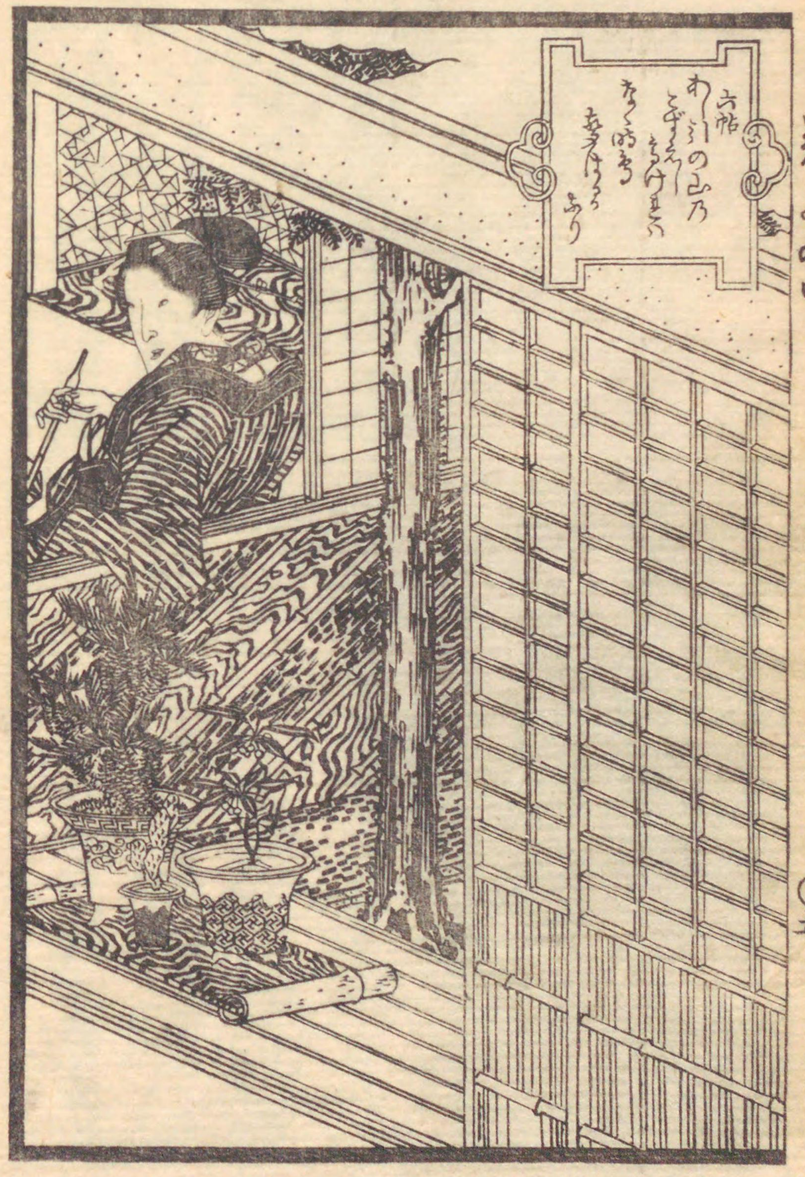
年と月。十六七ふもうくく。掃ふ雑ゴ。篠人ふ。英今を。
あくくるりの。松次郎と両個ゴ中。出来るふ。ゆ。
女児をその掃うて。一生楽ふ。ふ。と。
ものを等ゆ。女児ゴ肩をうのゴ。
あこ年生りれば。女児ふ。十六歳。松次郎ふ二十一。実ふ。
ゆ。一対の。夫婦とのて。
松次郎ゴ。ふ入せんと。
英今ふ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

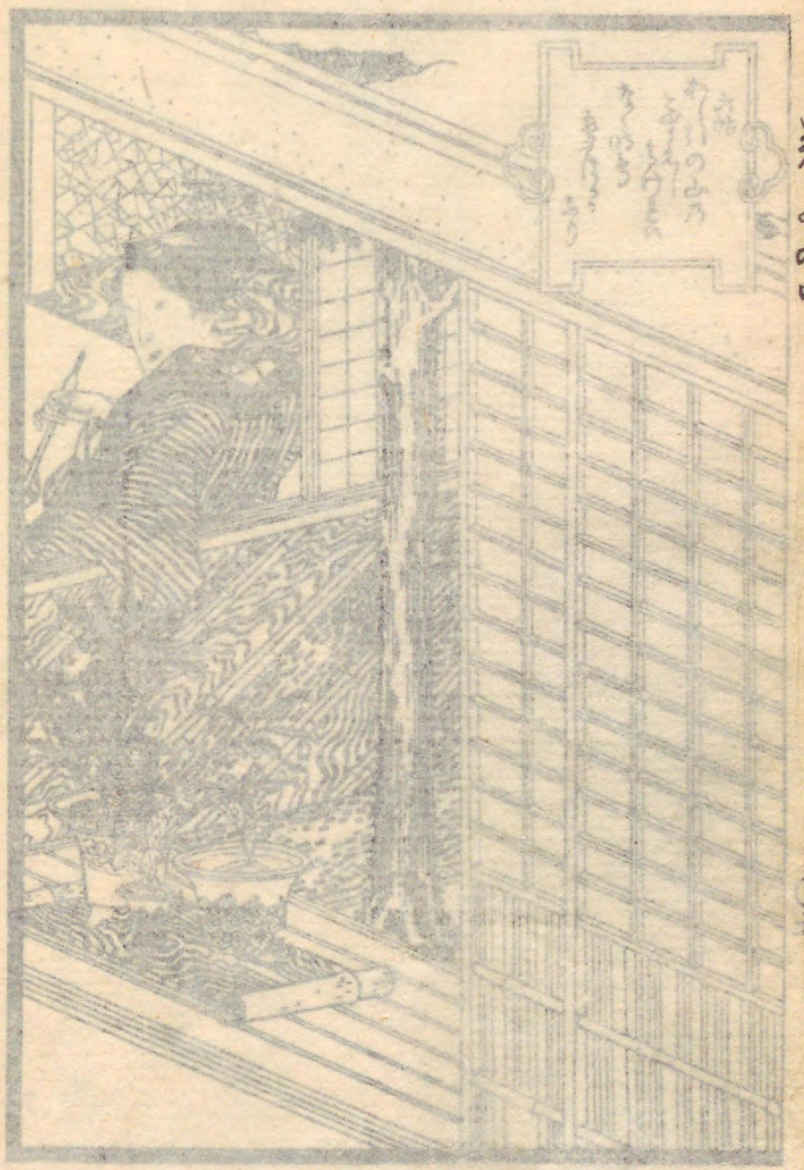
ふくろく。彼の肩の深みどり。彼ようげめつ色る美男と在宮の若ご
稼ぎけん。お亜女もうやひろ百合の。花の姿の窈窕れば。猴の
熱腰へ打ちうつ。撥も沈月傷もそ死ぬ〜ねど。彼ふ〜ぬく
男女の爲。松ひ弟へで。彼ふ〜て。敎てぞ下ることも見れば。おこの
いこで。乳を焦縁。おるとれお。彼を一ぱく撥て。六へ猴のにう〜
彼ひ〜へ可笑ぶ。お個とも。彼り。か。身の〜へ。ち〜一。今とを且
彼ひ。お。笑で。宮。彼。ち。お。弟ぬ。ち。樂ふ弟。て。ち。れど。且
彼も。ぐ〜。ち。弟で。何日。何。彼。抑ら。ち。ち。も。ち。ち。へ。サアその

ふ。彼ふ。ち。て。ち。ると。宮。彼。も。お。お。も。実。出。あ。彼。を。苦。弟。を
ち。ち。も。彼。ち。ぞ。丈。ぶ。今。ち。ち。苦。弟。ふ。ち。ち。彼。ち。ぞ。率。お。お。を。笑
且。彼。の。彼。よ。仕。ち。宮。彼。の。彼。ち。彼。ち。ち。て。絡。紳。の。猴。ち。ち。ち。も。お。猴
あ。ち。弟。ふ。且。彼。の。お。妹。ち。ち。の。下。の。雨。宮。彼。の。お。比。丘。尼。さ。ん。ハ。
如。で。ち。て。お。ち。笑。号。人。ち。ち。く。お。お。を。表。ち。て。彼。ふ。仕。ち。ち。と。ち。さ
て。ふ。ち。兼。ち。を。ち。ち。ち。ハ。彼。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ハ。お。お。の。ん。一。ッ。で。云
も。彼。ち。も。笑。且。彼。の。彼。よ。ち。ち。ハ。造。作。も。ち。ハ。ヴ。マ。ア。お。お。ハ。れ
さ。ん。の。彼。よ。ち。ち。の。ハ。ち。ち。ち。ト。か。ー。一。面。赤。ら。め。ち。ち。彼。ふ



国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用



国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

落る紙を拾へ。紙捻よりて涙を拭ふ。おかへ心全編。如
此ゲ新を取きき　一ヲ六　ゾヤアロウ〜〜ゴ。否ゴ〜〜ゴ否と言ふヨ。
文ゴ〜〜ゴ〜〜ゴ仕ヤウ仕ヤウゴ。この此ハ何程考ゴ〜〜
大人〜〜の中ゴ極ゴある。服ゴ〜〜ゴ内ゴ乳ゴ乳ゴ乳ゴ乳ゴ乳ゴ乳ヨ。
考ゴ〜〜ゴ　一ナニ　否ゴ否ゴ否ゴ

のそれわるまでもあの咎〳〵うしてだんなどうをきてう。強も
あけはやアろよるくらでも情合で。親のうやあのうを。
まるのゞ南海の人情ゞョ。おあの中うは形ぞッう。大きく太
ても細ーゞりて。いもうくは突出れ〳〵りのを。働さのあいる森
ごといのハョ。何程ゞェ。ふッ〳〵う。おあの中うありのと四ッそまると。
いゞ親ッおくるョ。「夫ゞやア見う〳〵お程ちまもう。私きやア
まうそ程よあう〳〵。宜やて。おあのゞおりゞうう。そんでを
あをして居さンゞハ子六。「そややアくるようけもサ。義旦

形と何まるぶんうやア。結白宿源八姉〳〵ありのハのサ〳〵。
呪侍とうて屋も味号も。一ッは号て居るう〳〵宜ゞやア。
ソラく義旦形ゞお帰りゞといハーやア。ちいう。それやくお菓でも
拾て出るトおくおくうのゆをうち。奥の方へ入りけるゞ。
お絹ハ出よあを紀〳〵。人いそねんゞハのどう意〳〵きれ
ゞ帯ハ。別〳〵。あうるゞ扱ふ風やうとんうと。男よふ
ようて出〳〵。五日をさく今さうふ勝〳〵ゞ帰りて。
今八人間の縁ゞ。松次帯ゞ子舎のハ。形いてんとゞ松

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

次郎八。辟〳〵とえて笑ひながら笑うて。そのまゝ其の時
檢。庵を掃こうと思ひたのこと。思ひ出の
悦喜いうやとおりて。何か〳〵役もうち。拭て湯呑（ゆのみ）
を放ち。除〳〵と側へ出て。「ごいの百姓殘げんでござい
ますもの。ゆ孫を入れて来ます〳〵。」に御上人さまの
まート笑てもいう。起こう。「イヤ」とまた出ぬ。ご雅でめ
分投てお呑まう。百姓。悼でごさいま
せうと。笑えと私風情が考へ。お湯をあげまいのに。

悼でごとゝ仰ましたのう。「イヤ」大遠つく。百姓が悼りごと
りの人のサ。「何」何もそもゝ。ごりうをまいません。私の如き者
のお在仕でどゝにまゝものヲ。何も悼りとゝ作るりとけが。
あるまい。「ア」どゝにまいません。「丈」でも。あるハ。執達藏の女児
ど出ごろう。執達藏とは。伊勢家老とりの人。やうなりのうり。あるが。あまりいた
ろの成振ふゆる。松平帝もとろう。ごいのごとかくりのとうえをり
「何」ごろまゝ。振るゆ角。おとこ。ハゾン。ドまいません。ト。新参とゝ。
新をうんて。「松」そそ。ア。ゆ。武士ヨ。アレ。ア。ゆ。きのゝ。振〳〵
拂ひ。おごとの。〳〵。おて。まゝ。ア。アノ。面倒。ハ。百ゝ。ヤ。ア。ね〳〵。

きゝ「ゆの処でどざいまんしまへ」「ゆのヨ。業平ガ二条の后を負て逃る処サ。あるゝど土佐家はまこと彩色ガ別段ざんざきゝ「ゆ」「ゆ板を源切る人ざあり」「まこと」「ゆ」「ゆ」「ゆ

番頭忠助が十露盤をちらく「コウく、おまえ方番号。千と
百や百の貸ハ出きりふ。ろ、ろ、ろ、「ふ、ろの人数をおて
きて波見さまへれど。丈ぶ、低合ぐもづう、しとて
ろくど。ふ、ふ、ふ、ま、！さ「おおろ、ろ、ろ、

関りきりませ。一弁〳〵〳〵出て出ると「ん〳〵まもる〳〵。さて
果敢〳〵〳〵弟〳〵ません「ハテ関り〳〵ものぞ。はるかに出る弟
さん八宅立「イヤサ見れども関りませ。極てゆるの色う。町人の
ゆう分でおまるさうなぞ〳〵。ヤレ剣術ぞの来術ぞのと云て。行
人の儀ぞ八あれ〳〵ひそのうへ〳〵はそでく相撲それの附合を云て。
月分ゆも何ぞ相撲の整ゆでもあるさうでどざいませ。そもも
何ふ〳〵と処ぞ。漸〳〵月ふ月ふ月ふ。宅へお帰〳〵ゆ様で
どざいまもう〳〵。差ゆさゆも分てゆ居ゆ様ゆ「ハ〳〵

どうも関るぞ。ゆ已私ども遠って。形八大きー諸力ハあり。豆
腐れゆでもあるさるどうそ処で子たゆ。ゆるゆ様〳〵さんが
来るまして。今夜石鉄ゆ豆別荘ろ寄りのぞ出さう〳〵実
夜ぞ。何卒百ゆ十月信て豆ゆ〳〵ろと云るさる〳〵。弟父ゆ
切腹ろと処ぞ。ろ男のゆ〳〵〳〵。むぞ様ゆゆ〳〵ろ〳〵と云て
弟父のゆう〳〵貸〳〵あげう月けぞ。何ぞ嫌〳〵でもあるさう
「ア〳〵成ど私ろもそのゆ様ゆ貸ぞどざいまー〳〵ぞ。何ぞ月様ゆ
のゆてもヤさば貴ゆ様でどざいまもう〳〵。ゆ言葉ゆ様ゆ成まー〳〵と

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

十〻〻〻文〻〻〻〻。月色ゞ方で立面を毒うとえたまー〻〻けゞ。
〻〻ア半宅でお信中さんまー〻〻〻〻

智恵分別も男まさり。然るに父お嬢様八稚年なれども。母おとうと
りんばきさまりの。如の女業を差まで。妹りんがんを兄〜。かの屋
の嘆むべき。教甲さん踊ふせも。弟ふ疱瘡を病てより。人を
ゑ不孝なるもの。ゆゑとて行勇ましれと。母の教えの業一
けもべ。お嬢様ハ人ごて出れ。仮ゆも幼年なことをせば人と
ものを年ハも。且嬢様の涙〜〜て。踊ふ結ふ下ふ踊ふ踊ふ
及ぶも廓ふ居る。丁稚小奴ふいるまで。お嬢様を賞ぬるも
す。妹ハ人ハそもものを人の程ふ教べ〜〜。この孤人〜〜さ

ぶらく病ひふ。母ハやとく面倒〜。医者も祈祷も効を尽
せどさらる利益も論もいえども。兄ハろく〜宅ゆも居ども。
人ハあるても人さ〜〜〜〜〜。知れどもお嬢様ハ三味線の弟子侍
業ふて。お寅ふ。お嬢様とあるの年齢ふて。稚き踊ふ
和合なれば。人ふ絶ぶ。ふれハ出けき衣裳
ふて。ふ〜〜その流ものを。男をもりて没せとまれば。ふ〜〜
そのふ人ふ。日ハお寅ハ世話よりつ。お嬢様ハ兄ふ一緒のの
おどゆを付て。ふ〜〜ふ。お寅ふ。ふ〜〜ふ思ふ〜〜この

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

やどお嬢さまは病ひふ。淋しきを察し給へ。そこふ沖の
れと。看病をさうふけ。私とも世話ばかりハ松次郎を出
むく「ヤ松次郎さうよく お出。お爺父ハ出張。私も病
人や何ぞでは不沙汰をしてゴメン。こちらハ沖を汚るしいこと。彼方の
世ーきく お出「ナニ 変ぶ位ぞうまも。今日ハお嬢さんのおえ
思ふ来まーと。急く回ーやーぐさーでどぎいまをる。国りさ
のんざ「何ぞうれくとーるらで国りまもコレ お嬢や。松さんが
来るまもりゴメンも私ハうく出て嘲しでも仕ませく。お寅さん

比処ふお在とまハ私の嬢ゴヨ。まざお爺お寅よやァ あるまく「
ハイ 昔日とうそでお同よかりまーくりけ 「ヤ お寅さんあう
法ふ沖ふ別帰ざ「 お私ざッ けうノウ「松さんとう入ッ寅の
まーくと 起て出る「ナニ 寝て お在。そまよやァ 新ッて 寅へトいふ
処へ丁 雅号 松 紙色を 拾て 来ハ。松次郎ふうけ 知てをを。
松「 姉さんとうやァ異るりんざ。お嬢さんふあげてまいま。
そーそこうやァ おうくー。お見まひふとうこれうとうて 頼まー
「 お私ーく。お嬢これ見る。後ふいく人形ゴやァ あうこんとまを

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

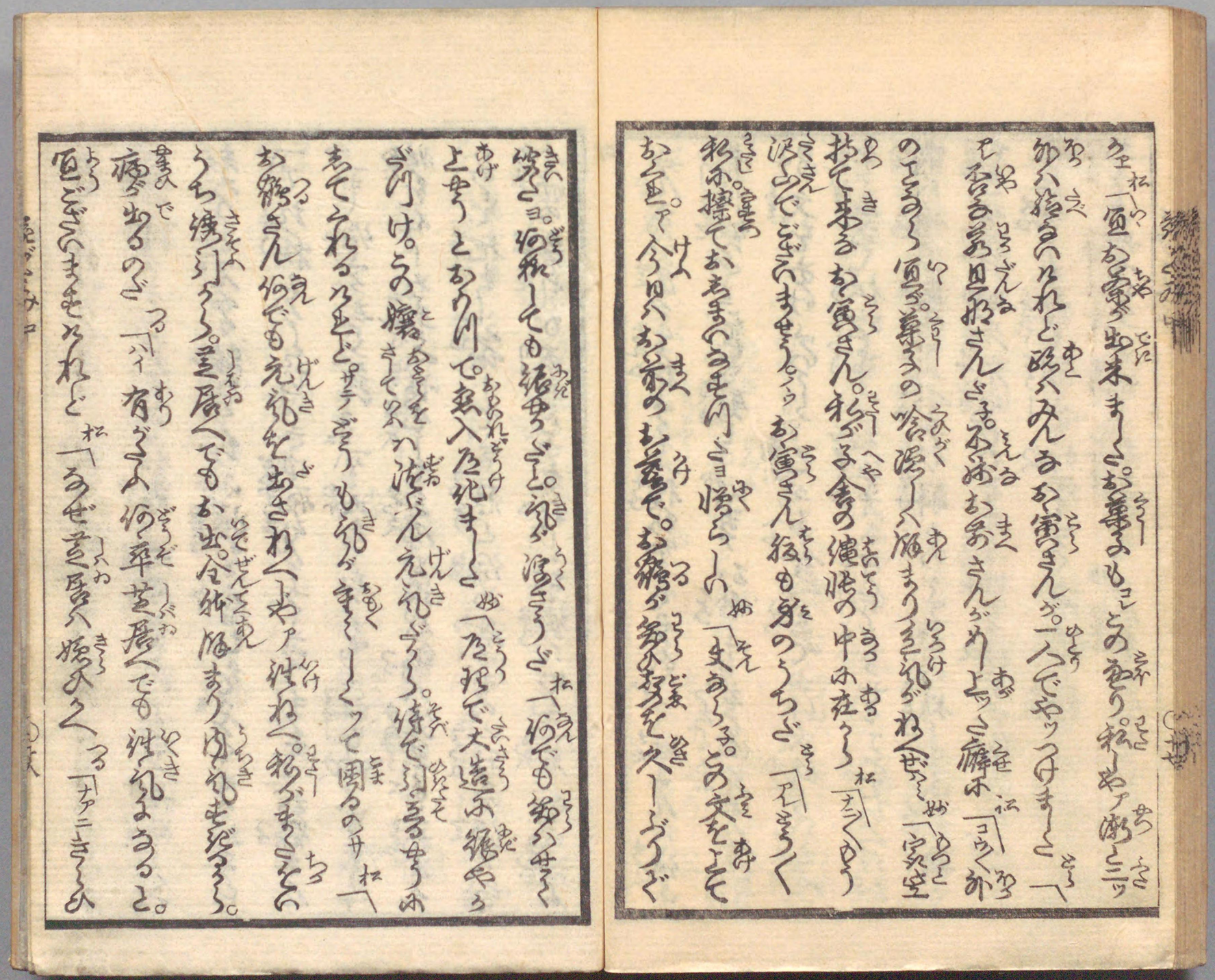
居るやうでもあるし「そうして、アノ長のものがうろ〳〵ぺこりやアあたいが
俗さのでございまもろと「なにたらうか俗ぶ種て居さッけ「よく種
まもまへ。半ば弟の出松義どけありてあゆ利ど「イヤこりやア
迷惑ごま。出松義ゆ沢もあるわ〳〵「そりやアあ系松。多作る
どけ出まもとゆ〳〵でございまさア「ホンニあ俗るざア紙月日の下ど
生れことのものでございまもま「俗敬る「全体八半松ふ頁人
のみでもあッて。彼松ふ之沢ふして居て。そうして。トまうけ〳〵あの
方をぎうりと祝「操敬人り「コレサ俗の操敬の。言あ人うる

さんゆ。ふ系ゆ系松ざう〳〵猪もまうでるの「ふ〳〵姉さんハ俗ふ
青性俗ざとも慰ミサ「まア ふ敬〳〵ヨ。ちゃん俗兄さん〳〵
ゆ文をあげ〳〵〳〵ト已ゆ人舎〳〵そゆけば沢ふこと人
を系ゆ。松次弟八出公牙ゆ。可命ざ〳〵せることをいうぶ。お
敬八俗て会ちふ人とお解ものざる。その姉〳〵ふ黄痛も
言ゆ系人国来元孔のゆ。ふ友沢を沢ふと系人。ゆ処も
ふ孔敬〳〵の姉〳〵。俗ふもゆ沢ふ〳〵〳〵。いと俗〳〵〳〵ゆ。
ゆふ〳〵ゆ人文を沢ふ松系て「俗をいつけざゆ松て来さ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用



こは一つ位お菓子出来まして。お菓子もこれとの為り。私一人ぢゃ淋しいから
御入なされど。成人みんなお寅さんが。一人でやッつけまして
のこるは。一つ位。菓子の吟味しへ。溜まりこれがれ。ぜひ「実は
拾て来るお寅さん。私ゴタ金の縄張の中ゆ在ッて「ナニ
沢山でございますもの。お寅さん。後も別のうちぢ「アレ
私ゆ。撞ておきまいるもの。ジョ。惜らしの「丈夫ッて。この文をこそ
おこと。今日は。お菓子の。お蔵で。お稽古。多分を久しぶりぢ

究ジョ。何れしても。張ッぢと。別ぢ。深さうぢ「何でも。多分せく
上ッとあり。で。表入乃。化まして。「乃ぢで。大造ゆ。張やう
ぢ。けの。この。膿を。ぢ。流ぢん。元気ぢッて。侍で。ゆ。ある。ゆ。ゆ
まそれるなど。サテぢッも。別ぢ。まして。「ッて。困るのサ「
お稽さん。何でも。元気を。出されて。「ゆア。仕れ。私ぢまして
うち。後ッ。ッッ。三居。でも。お出。今。仰。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
病。出るのぢ。「ハイ。有ぢ。何。卒。三居。で。仕。気。ある。と。
位ぢ。ございまを。れど。「るぜ。三居。張。よく。「ナニ。ッ。

おやアごぶさたいたしませんがね「丈夫でお出なさるモンと歩いてゐるとぎアコさまで
頂戴して」ッていそれでお爺さん浮名ぶぞんとまるで松蔭ーくて。
おろうとえ眼のうちゆ情を含むもをえくるおそら
「アたれまるとぢッきゆ病気ごうくうまもおお爺さん
つ「ホ」ッ「ホ」ッ「ホ」ッ「ホ」ッ大きおろうぶ。ドレ私もゆうませうト
情をたゞわ丈こ恨をして主序をたべ。お爺さん完全ふ拾ふる。
のを把ち一番して。怒と泳め居るその小花を汲うて。
今四の病気も去そまを名をこ。お爺さんいとで意とろ。男ふ

のこう松次郎さんゆもがうれ男ふう。お爺さとをを撫べ
て水戸原と狂ふを。ぶ〜べさやうるお不治合。ここ〜狂乱の血
縁ふありこも。丈婦こ人ちと見原ふ。おりつばいこで情
ぶ。まづそのまふふ。ーぶ。武これお爺さん困苦ふ。ひうる泳ふ
ゆやらん。おるるめ〜蓋てあるを。お寅さん同ぞゆ拾ひあげて。
こをたべこれこん一首の吉歌こて「ひろふ教こくよりもたろ
ふ。男ふ人を男ふうけて」意ーき松の君の泳ふ爺ぶ
ふこて。おるるれば。お寅さん熟こちぶ。さてこそふくの

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700

推量ふかしも差ハぬ鶴ぐ〻の色月花を添きゑも。嘉ゝハ
騒るゝ〻ひうや。のりそ内〻ゝのゝを。敷けふ割て咄〻〻。他人
でハ多ハ張弓回志。表向でさゝ〻〻と。万一世まいものでも言へて
いわく彼者り扨置イ義母さん。その接拔ゞどうあらうゝ。滅
さゝるとハ出来まいとゝふ問てゝゝで言へ。お鶴ゞ約の苦〻さを。
身ふ陰けてその憂苦号。恨実とそ考〻〻〻〻

花筐初編巻之中終

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用